



あるかいど 第四十四夏号 目次

〔小説〕

灰になる牛

聖二月

幻夏

芽生え

昭南の夢

風に吹かれる本田君と私と

へたくそ

〔旅行記〕

サハラ之夜明け

まだ旅は終わらない

—— アメリカ東海岸紀行

荻野

央

4

池戸

亮太

24

小西

九嶺

40

鵜瀬

順一

58

佐伯

晋

67

高原ちよみ

80

小島

千佳

89

木村

誠子

108

高島

寛

142





〔小説〕

赤い鉄アレー

橋

夢違え^{たが}

ボスは吠えなかった

差出人のない手紙

羊かん

創る

未明まで

二上 法幸

船越 恒子

奥畑 信子

山田 泰成

亀谷 美子

池 誠

村井理恵子

楠本 一功

163

184

198

206

217

225

238

261

あるかいど四十一・四十二・四十三号の反響

編集後記

同人名簿

279

282

283



【あるかいど四十一】

四十二・四十三号の反響

■季刊文科五一

同人雑誌季評 勝又浩

☆二上法幸「あきちやんとゲン」

(あるかいど41号)

平成七年の阪神淡路大震災で孤児となった五歳の女の子「あきちやん」が隣家に貰われてきて、そのお披露目にやはり子供のない主人公夫婦が招待される。そこで飼っている犬の話をする。あきちやんは直ぐ見たいという。連れてゆくと二人、子供と一匹はすつと抱き合つて、まるで旧知のように仲良くなる。その犬ゲンは、実は土佐犬をも噛み殺すほどの猛犬なのだという。一方あきちやんは地震で祖母両親と共に愛犬も失つていたので。以来、ゲンと二人の朝の散歩は雨の日も風の日も変わらない日課となる。それから五年、主人公夫婦は引つ越すことになるが、主人公は涙を飲んでゲンを彼女に預け

て去る。しかしそれから……話の紹介はそれくらいにしておこう。子供や動物に弱い私にはころりと参る一編だが、といって児童文学ではない。子供にせよ動物にせよ、その純真の表現は反つて難しいのではないか。それが素直に伝わってくる作品というのは、実は多くないことを付け加えておきたい。

■神戸新聞

二〇一一・二月二六日付

同人誌 竹内和夫

☆小西九嶺「はぐれ雲」

(あるかいど42号)

定年後の水彩画教室で知り合った三人が大阪近郊へ登山に向かううち、肺気腫を病む主人公の道彦が同行の男女二人から遅れ、脇道に分け入り、杉林を切り開いた急斜面を転落する顛末を描いている。脚を骨折して腹ばいになつて進む臨場感、生死の境をさまよう幻覚が鮮明に描かれた好短編である。

■民主文学 二〇一一・七月号

同人誌評 平瀬誠一

☆多紀祥子「ゆうづき」

(あるかいど43号)

木地師の生活を描いた作品である。木地師というのは「良木を求めて山間に可住し、全国に渡り歩ける通行手形を持ち良木が尽きると転住しながら、腕や盆などを創り続ける仕事師」のことである。

この正月には、二十一歳になるという主人公の樹里もまた、代々、木地師の家に生まれた。彼女は十七歳の時に優れた腕を持つ、木地師小椋徳蔵の息子清吉に嫁いだが、結婚した翌年に清吉は徴兵にとられ、二年間の兵役を終えて帰宅すると腸チフスを発病して、あつけなく死ぬ。それ以来、徳島県木屋平村の山小屋で義父の徳蔵と、中風で寝たきりになつている姑のキクとの三人で住んでいた。今日も商売のために、徳蔵は麓の町

に出かけていた。樹里は、囲炉裏に掛けた芋粥が噴きこぼれるのをしゃもじでかき混ぜながら、義父の帰宅を待っていた。

山犬の遠吠えが聞こえてくる。木戸を押しあけて外に出ると、日はとつぷりと暮れて、風の騒ぐ空には細い夕月が冴えわたっている。その時、闇が動いて、荷物を背負った徳蔵の姿が現れた。

樹里は囲炉裏から湧いている湯を汲んできて徳蔵に足湯をつかわせた。

「きょう、あいつは来なかつたかね？」と、徳蔵はいちばん気にかけていることをきいた。権藤という男のことである。

「ええ、来ました。お昼過ぎに」

「ほれで、なんと言うたんや？」

「また来るつちゆうて、帰って行きなはいました」

「べつびんの後家やのう、ええ嫁ぎ先も世話してやつとよ」権藤はいつも樹里をなめるように見るのだった。

徳蔵は足湯をすませると、山の神の神棚にきょうの無事を報告し、どぶろくの瓶を持つて来ては、囲炉裏の前にあぐらをかいて、ひとり呑み始めた。

樹里は腕に粥をよそつて徳蔵に渡した。

「土産ぞな」と徳蔵が言つて、懐から赤い足袋を出して樹里に手渡した。

「まあ、なんてきれいな足袋」

「履いてみいや」

「もつたいない。お正月はんまでとつておきます。町にはこんなきれいなものがあるんですか？」隣の間で、キクの咳をする声が聞こえる。キクは動けない身体で、二人の話に耳を傾けていたのだらう。樹里はこれが姑の抵抗だということがよくわかつている。

ランプを灯して、徳蔵がまた仕事を始めた。徳蔵が轆轤の爪に、腕の外枠を打ち込み、樹里は前掛けをして座った。

「雪や、初雪や」

徳蔵は轆轤を回すのをやめて、囲炉裏の前に座った。樹里は徳蔵の後ろ姿

を見ると、なんだか遠い所に行つてしまふ人のように思えた。

「かわいそうに、こんな暮らしをさせたいもうて」

「わたしはずうつとこの家において、おとうはんの轆轤を引きたいんです」

「いいや、おまえは清吉の嫁やないか」

「けど、わたしの気持ちは、もうおとうはんのところにはかないんです——」

樹里は徳蔵の前に立つて、帯を解き裸になつた。徳蔵は樹里を後ろから抱きしめた。「明日は権藤の話を通ることにしよう」と徳蔵はきつぱりと言つた。

山村で、木地師という仕事をしている初老の男と、その仕事を手伝っている夫を失つた若い嫁の、お互いに深く魅かれあう心を、静かな筆致で描いている。

この二人の背後には、兵役を主な理由として死んだ若い清吉の姿も表現されている。

☆奥畑信子「母の花壇」

(あるかいど43号)

この物語はひとつの家族が、無残にも崩壊していく物語である。その日は母の還暦祝いの日であった。自分の還暦祝いに本人が祝いの料理を作るといふのも奇妙なことであつたが、父がそわそわしているのは、母がちらし寿司をつくるというだけでなく、兄二人の一家や結婚したばかりの姉夫婦が来ることを楽しみにしていたからであろう。「私」は高校を卒業して製菓会社に勤めていた。

お昼前になると、上の兄が夫婦でやつて来た。続いて姉夫婦も来て、下の兄の一家も到着しお祝いの宴が始まった。

みんな口々に祝意を述べて、父が乾杯の音頭をとった。「今日は、お母ちゃんの還暦祝いに集まってくれて、ありがとう。ここへ引越して来て、丁度十年の記念日やし、ほんまに嬉しいことやな。ハイ、かんぱーい」ビールから日本酒に変わり、母の還

暦祝いの席は、どんどん盛り上がつていった。その時、ふと母が「生垣の向こうから誰かがこつちを覗いているみたい」と言った。「ほんまやな、誰やろう」と父が言い、「作業服を着た人が何人かで測量してるみたいやで」と姉が立ち上がつて言った。「この辺の定期的な測量やろ。気にせんと、放つといたらええ」という上の兄以外は、皆不審な感じを抱いたようであつた。この事件が重大な意味を持つことがはつきりしたのは、母の還暦祝いの日から数日後の事であつた。「私」が会社から帰ると、居間で父と母が上の兄と向き合つていた。父が兄を叱責する声だけが聞こえてきた。兄が帰つたあと「私」は父に呼ばれた。父の向かい側に座ると、父が「明彦がなあ、お母ちゃんを騙して、権利証やら実印を持ちだしてこの家を担保に、ぎょうざんのお金を借りてたんや。もうにつちもさつちもいかんとこまで来てるらしい」と言った。

数日後、再び上の兄が父と話していた。しかし、全く埒が明かないようであつた。ひと月ほどが過ぎた頃、父が母と「私」を呼んで「明彦は、何に使うたお金か結局言わへんかった。何とか家売らんでも済む方法を考えたけど、無理やな。このままでは、明彦が会社もクビになるし下手したら手が、後ろに回つてしまうから、この家を売ることにする」と言った。

隣の町の石切神社の近くに今住んでいる家の三分の一程の広さの家が見つかった。引越しの日、母の姿が消えた。「私」は姉と一緒に元の家まで探しに行った。母は昨日までそうしていたように、花の少なくなつた花壇に水をやってる。この家を買つた十年前から花壇を作り、水をやってきたのは、母の慣れ親しんだ習慣であつた。

この小説が、父ではなく母の思いに焦点をしばりきつてあつたなら、もっと深い感銘を呼ぶ作品になつていただろう。

編集後記

●はじめに東日本大震災で亡くなられた方々へのご冥福をお祈り申し上げます。この度の大震災は我々の住む日本を根本から曝け出した気がする。天災に対する国土の脆さ、政府の貧困、醜さ、行政の限界、東電の手前勝手ともとれる体質、産業構造の弱点など多くの課題を突きつけた。それにひきかえ被災者の整然とした忍耐の姿や、国民の支援行動には誇らしきものさえ覚える。日本再生の可能性を感じさせる。万人の犠牲者のうしろに、新たな命の誕生のニュースもあった。私たち物書きの力はそのようなもののような気がするが、少なくとも未来への光を大事にしたい。●先日、京阪京橋駅のホームに私の並んでいる列に女性の割り込みがあった。それからこれは別

人で、ホームに入ってきた電車に私が乗り込み空いていた席に座ろうとしたら、いきなり横合いからその空いた席に座ってしまった女性がいた。ともに二十代と思しき女性。二人は携帯電話を隠れ蓑に周囲を無視していた。国歌の斉唱時に起立して歌う大阪府の条例や最高裁の判決があったが、身近なところにはびこる公徳心の乱れを目にすると、何となく腑に落ちるように思えてくる。●本誌も四十四号を迎え多くの作品が寄せられた。手前勝手だが、日本人の伝統的な心の優しき、奥ゆかしさを秘めた作品が多かったのには救われる思いがする。

(一)
●四十四号は小説十五作品、旅行記二作品が集まった。今までであっためていた意欲作が一举に集まった感じがする。四十号の記念号に劣らぬ作品数と枚数である。この勢いが五十

号、六十号の記念号へと続くことを祈るばかりである。●今この国は三月十一日に起きた東日本の大地震、津波、原発にゆれている。この国だけにとどまらず全世界が注目している。私たちは決して目をそらせてはいけない。一日いちにちが新しい発見であり戦いなのだ。●こんな時期に不謹慎な話だが、私の毎日は現職の時よりもいたって忙しいのである。毎月の予定表はびつしり詰まっている。七十五歳を超えてくると、内科、外科、歯科、耳鼻科、眼科と産婦人科以外はほとんどお世話になっている。そこへ地区老人会の世話や、腕のいつこうに上がらない書道や陶芸。更に忘れてはいけない大事なもう二つ、文校と「あるかいど」が加わる。まあ遅ればせながら、私なりに大急ぎで、人生の後始末をしている積りでいるのである。

(泰)